【書評】

田村和宏・玉村公二彦・中村隆一編著

『発達のひかりは時代に充ちたか？』

（クリエイツかもがわ　2017 年）

発達のひかりの灯火を受け継ぐために

木全　和巳（日本福祉大学）

（Ⅰ）はじめに

2017 年 2 月 4 日，びわ湖大津プリンスホテルで開催された『人間発達講座』に参加した折，基調報告をされた田村和宏さんから，本書をいただいた．エピローグを読むと，足かけ 3 年の労作とある．発端に，全国障害者問題研究会（全障研）の初代委員長でもあった田中昌人先生の資料保存プロジェクトの成果の一部とあった．実は，大泉溥先生から，このプロジェクトのお話は伺っており，その成果の一部である『日本の子ども研究――明治・大正・昭和――第 13 巻　田中昌人の発達過程研究と発達保障論の生成』（クレス出版，2011 ）のもとをいただいたことを思い出した．院生たちとの研究会の様子も，折に触れて伺っていた．いま思えば，この時，きちんとわたしも参加しておけば，この書評も含め，もっとよい仕事ができたのにと思い，少々，後悔している．

ちょうど，全障研の 50 周年の出版事業で，「『発達保障論』は人間の『障害（disability)』をどのように理解しようとしてきたか」というテーマを割り振られ，悪戦苦闘の最中である．大泉先生が編集された 900 頁を超える「田中昌人初期著作」を読みながら，あれこれと田中独自の「発達障害」概念にはじまり，「獲得の障害」「機能障害」などの「障害」概念をどのような意味で使用していたかということを「発達理解の発達障害」という言葉にも出会いながら，整理をしている途上である．

ちなみに，大学の障害者福祉論の講義の中では，第 1 回目に，導入で NHK スペシャル『ラストメッセージ――この子らを世の光に』(2007) を観ることと，第 6 回目に障害者福祉を支える主な社会思想の一つとして「発達保障の思想」を位置づけ，『夜明け前の子どもたち』の一部を観ながら，糸賀一雄，田中昌人の「発達保障」の思想を取り上げる程度である．この点では，玉村さんが書かれた本書の第二部の制作過程とスタッフたちのエピソードや，中村さんが書かれた第三部のしもちゃん，なべちゃんたちの精緻な分析は，これからのわたしのつたない講義をより豊かにしてくれる内容となっている．それでも，この記録映画に描かれた発達保障実践の意味と価値を時代背景も含め，わかりやすく伝えることは，なんとむずかしいことか．

こうした状況のもと，田村さんが書かれた「第一部　発達保障の実践を築く」を中心に，書評をという依頼を受けた．「田中昌人初期著作」の中には，糸賀一雄との共著論文もある．何か因縁めいたものを感じつつ，せっかくの機会をいただいたので，田村論考をわたしなりに読み深めてみたい．

（Ⅱ）びわこ学園と島田療育園

田村さんの論考は，第１章が「「夜明け前」につながる重症心身障害施設の胎動」，第２章が「『夜明け前の子どもたち』と実践をつないだリーダーの教え」，第３章が「いま，療育は」の三部構成になっている．

第１章では，1960 年代初頭，高度経済成長期の中で重症心身障害児の置かれた状況とその対応としての重症心身障害児施設の内容について，病院形態から出発して医療を中心にした島田療育園と，「精神薄弱児施設」を母胎として発達保障の観点から出発したびわこ学園とを比較するかたちで，びわこ学園の特色を描いている．

金沢大学の河合隆平さんの講演のときに聴いた島田療育園とびわこ学園の職種別職員配置の比較の話が印象に残っていた．河合さんに確認すると，田中昌人（ 1974 ）『発達保障への道②夜明け前の子どもたちとともに』（全障研出版部）が出所ということ．これまでいかに自分がこの本を丁寧に読んでこなかったのか，少しはずかしい．改めて読み直しつつ，確認する．112 ページに島田療育園とびわこ学園の職種別人員構成（ 1969 年当時）の表がある．この表をみると，一目瞭然である．保母（島田 5：びわこ 24 ），児童指導員（島田 4：びわこ 20 ），看護婦（島田 15：びわこ 22 ），準看護婦（島田 21：びわこ 13 ），看護助手あるいは療育員（島田 53：びわこ 22 ）などとある．島田療育園が，医療分野に偏りつつかつ専門性が重視されていないのに対し，びわこ学園は，社会福祉分野に手厚くかつ「準」「助手」という人が少ないことが特徴である．

田村さんも，こうした差が，当時の厚生省の理念と施策によるものであり，糸賀自身も開設のために「暫定的な意味」で同調したこと，それでも，「不治永患」「社会に役に立てない子ども」への支出に，厚生省の中でも抵抗があったことについて触れている．そして，何とか開設にこぎつけていくのであるが，療育実践上の課題に加え，経営上の赤字，職員の腰痛問題の発生，そして，映画の最終シーン 49，50 の中でも出てくる職員の離職問題などを抱え，びわこ学園は，困難な船出をしていく．

現在，医療的ケアを必要とする重症障害児と，当時「動く重症心障害児」と表現されていた強度行動障害児への支援が，児童期だけではなく，青年期，成人期以降も，大きな課題となっている．田中昌人は，前掲書で，「重症心身障害児のなかの動き回る子どもを「非行少年」として排除するのか！」と，労働組合や患者同盟の社会運動に重ねつつ，今日につながる問題提起をしていた．こんなことも含め，今日的課題の原初がここにある．

（Ⅲ）療育観と職員組織論

中心となるのは，第２章である．ここが一番読ませる内容となっている．田中昌人という理論的な支柱を軸に，森敏樹と池沢俊夫という二人のリーダーの実践者としての療育観と職員組織論を中心にしてまとめていきながら，当時のびわこ学園の実践の意味と価値をつかもうとしている．そして，こうした実践が次の世代の加藤直樹たちに引き継がれていく．

一つ目の柱は，森の実践者としての療育論である．

田中昌人の「可逆操作」など心理学実験の結果と抽象的な思考を潜らせて産み出した概念装置も意義があるが，森が実践の中で紡ぎ出した言葉の数々が魅力的であり，説得力がある．たとえば，「発動機をかける」．田村さんは，この言葉には，「子どもたちの自発的な心のエンジンをかける」と「指導者側が子どもたちのエンジンがかかるように，セルモーターを回す（教

育的かかわりをする)」の二つの意味があったと書いている．こうした「発動機」という比喩が，後に，発達に固有な本質をなす内部矛盾である「発達の原動力」と目的意識的に組織された教育実践である「発達の源泉」という概念の創造に結実していくことになる．こうした大切な概念の誕生にまつわる話は，とても興味深い．

次の「したくてたまらないことからはじめる」もまたいい．まずは，子どもたちの「したくてたまらないこと」を見つけること，そして，職員たちも，いっしょになって，子どもたちの「したくてたまらないこと」を取り上げ，さらに「たまらないもの」にみがきあげ，何よりも，こころから楽しむこと．「まきこみまきこまれ」そして，「育ち合う」．共感的な関係を創り合うことが，発達保障実践の基礎であることをこんな言葉の数々から，改めて確認できる．

そして，二つ目の柱は，池沢の実践者として職員組織論である．

記録映画作りそのものを利用した組織論が興味深い．私事になるが，職員集団と困難事例の検討をする時には，よく映像を利用している．いまは当時と違い，簡単に録画ができる．検討後は，すぐに消去をする約束をして，実際に映像を観ながら，子どもたち，仲間たちの姿を確認していく．知的障害と脳性まひと視覚障害を合わせ持つ重度重複の青年の食事場面．どんな職員の働きかけにはどのように応じているのか．こんな声かけとスプーンの運び方では，ウーとうなり，払いのけてしまうとか．何度も繰り返し観ながら，本人の理解と適切な支援の方法を話し合いながら確認していく．厳しい職員配置の中でも，本人を中心とした理解と支援を具体的に探っていくことは，当時も現在も，変わらない．

池沢の「対象化しながら本質に迫る」ことと「話し合いを強調し，聞きあう謙虚さの醸成」は，現在にも十分に通用するという学習論と組織論であり，もっと学び，深める価値がある．

こうして，田村さんの文章を通して，出会ったことのない森，池沢に出会う．出会ったことがあるけれど，知らない加藤に出会い直す．出会い直す中で，次世代につなぐというかたちで，田村さんも受け継いだ①「「指導の一貫性で」職種間をつなぐ」，②「労働者を，要求をつなぐ」，③「地域の障害児者・ご家族をつなぐ」の三つの「つなぐ」もわたしたちに引き継がれていく．

(Ⅳ) 現代的課題にひきよせて

第3章は，現在の医療的ケアが必要になっている重症心身障害児の「生活論」である．第1章の歴史的経過，第2章のびわこ学園における実践論を踏まえた上で，田村さんの主張が打ち出されている．キーワードは，第2章のびわこ学園の初期の実践から導き出された「生活のどろどろとした部分を大切にする」と「多様な一貫性をつくる」である．

田村さんは，障害者権利条約の時代にふさわしい暮らしの場と日中活動の場を住み分けた医療的ケアを必要とする人たちへの地域生活支援の在り方を提案している．従来の「医療型」の枠組に囚われた支援観からの脱却である．こうした支援実践の基礎となるキーワードが，びわこ学園の中で大切にされてきた「生活のどろどろとした部分を大切にする」である．医療的ケアが必要な重症心身障害児者の生活支援を考えるとき，わたしたちの方が，現状の困難さを思い，まずは安心できる一体型の施設を増やすという施策に向けて動き出しやすい傾向にある．田村さんの主張は，びわこ学園の実践が施設内に閉じこもることなく，地域に開かれたもので

あるという志向を受け継いでいる．

そして，こうした「生活のどろどろとした部分を大切にする」実践を創造する職員集団と組織づくりの要として，もう一つのキーワード「多様な一貫性をつくる」を位置づけている．この「多様な一貫性をつくる」というキーワードは，よくよく考えると，考え抜かれているが故に，これを理解して，実践することが困難な理念でもある．

そもそもこの世の中に一人として自分と同じ人間はいないという原理が「多様性の原理」である．「個別性」とも言える．そして，改めて確認するまでもなく，「ライフ」と呼ばれる命は一個，人生は一回限り，そして，過ぎ去った生活はやり直せない．「だから」，人間のいのちの重みの価値は，誰にとっても，等しくなければならない．これが，「人間の権利」の原理である．「ライフ」のかけがえのなさ，尊厳の確認である．この「人間の権利」は，いつでも，どこでも，だれにでも，保障されるものであるという「普遍性」と「平等性」があるはずだ．このことが確認できるが故に，「差別」「排除」「暴力」「戦争」「貧困」はなくさないといけないはずだ．この「だから」を実質化するために，田村さんは，びわこ学園の先人たちの実践から受け継がれたきれいごとではない，お題目でもない「人間の権利」と「発達の権利」の確認を強調する．この「人間の権利」と「発達の権利」という理念を通して「一貫性」を捉えようとする．「多様な一貫性をつくる」とは，個別的で多様である人間の中に普遍的な人権と発達のみちすじを見出し，創造していく実践の宣言でもある．

（V）おわりに

本論考の価値は，何よりも，聴き取りもしながら，当時の資料を読み込み，びわこ学園の実践の意義と価値を現在の視点から改めて位置づけようとした点にあろう．映画には，光は欠かせない．映画がつなぎ，映画が照らした発達保障の世界．田村さんは，この論考をとおして，改めて異なった角度から，びわこ学園の実践に光を当てた．歴史的実践を現代の課題と重ね合わせつつ，その価値や意味を描き出した優れた論考である．

最後に，一点だけ，わかりにくかった点のみ指摘しておきたい．それは，第3章で使われている「パーソナル」の概念である．ここで使われている「パーソナルな生活」「パーソナルな生き方」という表現の「パーソナル」という言葉の意味が，わたしには，把握しにくかった．パーソナル（personal）は，辞書的には，「個人的」や「個人用の」という意味の言葉である．「パーソン」と「ヒューマン」は異なる概念である．おそらく，「人格的な」「全人格発達的な」「全人間的発達的な」という意味合いで積極的に使われていると想像しながら読んでいたが．

重症心身障害児者問題と「パーソン」「パーソナル」という言葉から，すぐに生命倫理の「パーソン論」を想像してしまうのは，わたしだけか．「ヒューマン」ではなく「パーソン」とした時に，例えば，相模原事件の植松被告の獄中からの手紙（『創』2017年9月号）の「意思疎通がとれない人間を安楽死させます．また，自力での移動，食事，排泄が困難になり，他者に負担がかかると見込まれた場合は尊厳死することを認めます」という言説を受けとめた「パーソナル」の使い方だったのか．大切な言葉であるから，田村さんなりに理解とその説明が欲しかった．

（きまた　かずみ）

「わからないことが多過ぎる」

かんとく　伊勢真一

＜はじめに＞

「わからないことが多過ぎる……」と言うコトバは，映画『夜明け前の子どもたち』の冒頭部分に語られるナレーションだ.

――わからないことが多過ぎる．しかしこの子どもたちも，人に生れて人間になるための発達の道すじを歩んでいることに変りはない．そう考える人たちがいる．障害をうけている子どもたちから，発達する権利を奪ってはならない．どんなにわからないことが多くても，どんなに歩みが遅くても，社会がこの権利を保障しなければならない，そう考える人たちがいる．――

「わからないことが多過ぎる」という立ち位置で，映画『夜明け前の子どもたち』を様々な角度から掘り起こし，『発達のひかりは時代に充ちたか？』という本にしたのは，田村和宏，玉村公二彦，中村隆一, 三人の障がい者福祉の研究者である.

私はドキュメンタリー映画の創り手,「わからないことが多過ぎる」というのを自慢にしてるくらい,「わからない」ことだらけのカントクだ…….

そんな私に『発達のひかりは時代に充ちたか？』という本の書評を書いてほしいと依頼があったのは，2017 年の春から数回に渡って，映画『夜明け前の子どもたち』を小さな映画祭（大倉山ドキュメンタリー映画祭，ヒューマンドキュメンタリー映画祭《阿倍野》，ヒューマンドキュメンタリー映画館 日比谷）で上映したからだろう.

丁度その頃私は，1983 年から撮り続けて来た，てんかんと知的障がいを持つ姪っ子・奈緒ちゃんとその家族を描いた『やさしくなあに～奈緒ちゃんと家族の 35 年～』の編集・仕上げに没頭していた.

その発端となった映画『奈緒ちゃん』（1995 年完成）のカメラマンが,『夜明け前の子どもたち』を撮影した瀬川順一さんだった．瀬川さんにとって『奈緒ちゃん』は,『夜明け前の子どもたち』の続編のような気持ちがあったのだと思う.『奈緒ちゃん』撮影中に何度となく『夜明け前の子どもたち』の話を聞かされた.

2016 年から 2017 年にかけて,『やさしくなあに』の編集に取り組んでいた私は，映画『奈緒ちゃん』で瀬川さんが撮ったカットを観直しながら，映画『夜明け前の子どもたち』をもう一度観たい，と無性に思うようになり上映を企画したのだ.

『夜明け前の子どもたち』（1968 年),『奈緒ちゃん』（1995 年),『やさしくなあに』（2017 年）は，瀬川順一さんというカメラマンを媒介として，私の中ではしっかりと繋がっている連作のような作品群なのだ.

依頼された原稿が,『発達のひかりは時代に充ちたか？』という研究書の書評と言うよりも，映画『夜明け前の子どもたち』を巡る内容になり,『奈緒ちゃん』『やさしくなあに』という自作ドキュメンタリーへの思い入れに傾くことをお赦し願いたい.

＜この子らを世の光に＞

『夜明け前の子どもたち』はこの映画の企画者でもある糸賀一雄氏の掲げた理念,「この子らを世の光に」を具現化した映画だ．重度の障

がいを持つこの子らの存在をしっかり見据え，耳を澄ますことにこそ，多くの学びがある．「この子らに」憐れみの光を当てるのではなく，「この子らこそが」光なのだ……という立ち位置だ．

そして，「この子らを世の光に」の言葉と共に，瀬川さんが『奈緒ちゃん』撮影時にドキュメンタリーの撮影論として語っていた「写すのではなく写るんだ……」，という言葉を，この頃しきりに思いおこす．

撮影現場で瀬川さんはこの言葉をよく使った．納得出来るカットを撮れた時には私の方を見て，「写ったよ……」と言ってニコニコ笑ったものだ．映画を創る側が観念的な想い入れで「写した」美しいカット以上に，「びわこ学園」の子どもたちや奈緒ちゃんたちの，動き，表情，時には言葉が，「写り」記録されることこそがドキュメンタリーなのだ，という確信に基づいた言葉だ．

「この子らに，ではなくこの子らを……」

「写すのではなく写る……」

「写った」カットをどのように受け止めるのかという深い思考があってはじめて，「この子らを世の光に」と言う時の「この子らを」どのような存在として受け止めるのか，と言うことは読み解かれて行くのだと思う．

その立ち位置に立って書かれたのが，『発達のひかりは時代に充ちたか？』というテキスト本だ．

写っていることを凝視し，その1コマ1コマに写る子どもたちの存在が語りかけてくることに徹底して耳を澄ます．言葉を持たない子どもたちの動き・表情に，「発達のひかり」を見い出そうとして……

このテキスト本が刺激的なのは『夜明け前の子どもたち』という映画の問いと向き合い，答えと言うよりも，問いを深めるような著者たちの在り方があるからなのだと思う．

＜50年に渡る思考の継承＞

『発達のひかりは時代に充ちたか？』は三人の編者がそれぞれ，「発達保障の実践を築く」，「『夜明け前の子どもたち』の製作過程と映画スタッフたち」，「あらためて『夜明け前の子どもたち』の発達の世界に迫る」，の三部を受け持って書いたものをまとめた共著である．

そして，このテキスト本は，映画『夜明け前の子どもたち』のスタッフの中心的存在でもあった田中昌人氏の，「発達保障」を巡る，長い根気強い研究を引き継ぐような視点でまとめられている．

ドキュメンタリーの創り手である私に引きつけて言えば，撮影し，編集し，自らまとめた映画『夜明け前の子どもたち』のそのワンカットワンカットの意味することを，完成後も，ずっと考え続け，深めて来た田中昌人氏の志を引き継ぎ，後進の編者達が丁寧にその思考の深まりを整理しまとめたものをベースにしている，と言うことだと思う．

1968年に完成した映画の，その後の50年近くに渡って深め続けられた「発達保障」研究の世界が，ここにあるということだ．

いくつかの例証が上げられている中でも印象的なのは，「りょうちゃんの10秒」として取り上げられているパート，「石運び学習」に参加しているりょうちゃんの一部始終の動きを記録した10秒間ほどの映像を，50カット程のコマを採録し解説しているシーンである．

映画では，撮影当時35歳だった田中昌人氏が，りょうちゃんにかかわっているシーンに田中氏自身の解説が語られる．

「私もまずりょうちゃんととり組みました.（中略）なかなか手ごわかったんです．石を入れても立ちあがってくれません．やれやれと思って持たした，ところが進んでくれない.（中略）とにかく石を運ばさなければ，ということでいろいろやってみました.」

この10秒間のシーンの意味を，田中は完成後も考え続け，70歳を過ぎた37年後，亡くなる直前にもう一度分析しなおしている.

10秒間の1コマ1コマのりょうちゃんの動きを微に入り細に入り調べ，その心の動きを分析し，自説の革新に晩年まで取り組んできた田中の誠実さに深い敬意をはらいながら，田中の弟子筋に当たるテキストの筆者は，37年考えに考えられた田中の新説に必ずしも同意しない…….

「田中の新説を，実践における発達的交流関係の記述という視点から見るとどうだろうか.（中略）たしかに発達の真実にせまる理論化は抽象度をあげていく．しかし実践は具体的でなければならない．だから実践の再構成という意味では，別の接近が必要ではないか，（中略）むしろ1960年代から1970年代にかけて田中が発展させてきた『可逆操作』が適切であるのかもしれない，と思う.」

誠実なドキュメンタリー，療育記録映画『夜明け前の子どもたち』を通じての研究は，誠実に継承されていると思う.

『発達のひかりは時代に充ちたか？』ではこのシーン以外にも「しもちゃんが笑った」,「なべちゃんー実験と実践は大違い」,「うえだくんの・心の杖・と発達保障」，など映画に写った子どもたちの世界を1コマ1コマ拾い出し，その動きや表情の意味を，田中や製作当時のスタッフ，職員，研究者が撮らえた地点から，更に深化させようと試みている.

映画は、観られることで映画になって行く…….

『夜明け前の子どもたち』は，『発達のひかりは時代に充ちたか？』の編者達のような，映画を観る人，学ぶ人の存在があって，はじめて「映画」になったと言えるのではないだろうか？完成して50年，『夜明け前の子どもたち』はゆっくり思考を深めながら，『発達のひかりは時代に充ちたか？』という存在を得て，もう一度「映画」としての旅をはじめているのかもしれない.

映画でしか描けない真実を，手探りで，探り当てようとする長い長い営為の果てにまとめられた一冊のテキスト本，『発達のひかりは時代に充ちたか？』の編者たちは「この映画を“プラットフォーム”に，読者のそれぞれの豊かな『夜明け前の子どもたち』深掘りの試みを，積極的に展開していただけることを願っている……」と，読者にメッセージしている.

＜夜明け前……＞

私が，てんかんと知的な障がいを持つ姪っ子・奈緒ちゃんと家族の記録の編集に入ったのは2016年の春先だった．その時点で34年間にわたる1000時間を超える映像を，繰り返し繰り返し観ながら，その映像が語りかけることに耳を澄ます作業にひたすら取り組んでいた最中，2016年・夏，神奈川県相模原で障がい者19人が殺傷されるという事件が起きた．犯人は「障害者は世の中にいらない！ 役に立たない奴はいらない！」と供述したらしい.

35年間見守り続けた一人の障がい者，姪っ

子の奈緒ちゃんとその家族が生きてきたドキュメンタリーをまとめ，一人でも多くの人に観てもらわなければ…….

暢気者の私の本気に火がついた.

そして一年後，2017 年の夏に 35 年間の記録は，『やさしくなあに～奈緒ちゃんと家族の 35 年～』という映画にまとまった.

ほぼ同時期に『発達のひかりは時代に充ちたか？――療育記録映画『夜明け前の子どもたち』から学ぶ――』は出版された．そのエピローグの文章を引いてみたい.

――『夜明け前の子どもたち』という映画は，今の時代にもう一度出番を求めているという実感が強まりました．あたかも半世紀前，重症心身障害児をとりまいている闇の深さを前に，「その闇の深さは夜明け前を告げている」と喝破した制作スタッフの強さにも打たれます．同時に，この映画を観るたびに，「その闇のとばりはしっかりとひらかれたか？」という重い問いが私たちに突き刺さります．―

わからないことが多過ぎる……

けれども，わからないからこそ私はドキュメンタリーを創り続ける．わからないからこそ本は開かれ映画は観られる．わからないからこそ，私達は生きる.

『発達のひかりは時代に充ちたか？』が多くの人に読まれ，『夜明け前の子どもたち』『やさしくなあに～奈緒ちゃんと家族の 35 年～』が多くの人に観られることを望みます.

※『奈緒ちゃん』『やさしくなあに～奈緒ちゃんと家族の 35 年～』上映の問合せ

☎ 03-3406-9455　いせフィルム

（いせ　しんいち）

第 3 部『あらためて「夜明け前の子どもたち」の発達の世界に迫る』から受け取ったもの

西原　睦子
（大津市立やまびこ園・教室　発達相談員）

はじめに

『あらためて「夜明け前の子どもたち」の発達の世界に迫る』．なんと魅力的なタイトルだろう．というのも，この本は何をおいても映画「夜明け前の子どもたち」そのものを正面から取り上げている．障害児福祉・療育・保育・教育，発達相談に携わる方々の少なからずが一度は見たことがあるこの映画．映画が投げかける問いに心を揺さぶられ，この道で仕事をすると決意した人も少なくないのではないか.

私もその一人である．びわこ学園の長い廊下，ひもでくくられたなべちゃんのひもをとるかとらないかを巡る赤裸々な議論，ひもを解いて実験的に取り組んだ石運び学習，しもちゃんの笑顔…．インパクトのある映像とナレーション，田中昌人先生の解説で，障害を持つ人への見方，発達観が天と地ほどに変わった．当時，学生だった私は，通常発達を基準としてできないことを並べ，それが障害ゆえの特徴とする類型論には強い違和感を持っていた．そうした枠組みで子どもに関わると，子どもも私もちっとも楽しくなかった．むしろお互いの関係がどんどんしんどくなっていくようにさえ感じていた．この映画を見た後は，障害がある・ない，相談する人・される人という立場を超えて，共に「～に挑戦している」仲間と思え，何かから解放されたような，目の前の靄がさっと晴れたような気がした．そんな映画の“発達の世界に迫る”という表題．無我夢中になって読んだ.

初めて第 3 部を読み終わった後，「夜明け前

の子どもたち」と同じくらいの衝撃を受けた．後ろからハンマーで叩かれたようだった．それは「しもちゃんが笑った」にかかるシーンの考察を読んだ後だった．この見方を共有したいと，自分が働く療育教室の保護者学習会の題材にした．するとびっくりすることが起こった．このことは後半に述べるが，それほどのパワーをこの本は持っている．さらに二度，三度全文を丁寧に読み返すと，中村の意図するところ，提起が，厚みを持って構造的に立ち現れ，いろいろと考えさせられる本でもある．

第３部は，映画を単に発達的視点から解説したものに止まらない．「可逆操作」や「対称性原理」など言葉自体が持つ難解さを，映画に映し出された療育の記録から丹念に読み解き，誰にでもわかりやすく解説してくれると期待させる表題だが，その期待をはるかに超えている．近江学園，びわこ学園での厳しい条件の中つくり上げられようとしていた発達保障の考え方，田中昌人先生が提起した「可逆操作の高次化における階層－段階理論」を，完成されたものとして捉えるのではなく，子どもの姿や集団，おとなの関わりを丁寧に見ていくといろんな理解がありうるという可能性・多様性を詳細な映像の分析から見出し，不可分の関係にある人間の発達研究と発達保障に関わる実践において，子どもと育児者・実践者の幸せのために，発展的で開かれた議論をしていこうと中村は提起している．発達研究あるいは発達の理論化に関することは，実践現場にいる私には手に余るお題なので中村のような研究者に任せるとして，ここでは，その発達の理論を，発達相談をする際の子どもを見るフレームワーク（中村は「顕微鏡」と名付けている）として使っている一実践者が，この本をこう使ってみたという試みを述べたい．第３部の構成とは逆になるが，第３章の「しもちゃん・りょうちゃん・なべちゃん・うえだくん，そして私たちの発達……」を中心に述べる．

１　「しもちゃんが笑った」をどう見るか

しもちゃんは重度の身体障害と知的障害とをあわせもつ「重症心身障害児」で重症心身障害児施設びわこ学園の療育記録映画『夜明け前の子どもたち』の中心主題をになう子どもとされている．しもちゃんの登場シーンは決して長いわけではないのだが，心を揺さぶられる強烈な印象を与える．様々な関わる努力を重ねてもなかなか笑顔が出ないしもちゃん．体位の変換，入浴，日光浴，こうした当たり前のことが人手不足のためなかなか実現できない．なべちゃんのひもをとるかとらないかの議論と共通する社会的な問題がそこには存在し，どこに療育の糸口を見出したらいいかという実践の壁ともに当たり前の取り組みでさえ容易にさせてくれない社会の壁にもぶちあたっていたと中村は論じる（p.132「拒絶の壁」）．そんな中，現場が何とかしもちゃんの笑顔をひき出そうと一歩前に進んで取り組む．その取り組みがあって出てきた涼しげだけれども柔らかい笑顔は強烈なインパクトを見る者に与える．人間の発達をどう捉えるかの根本的な問いを投げかけられ，実践者にとっては最も鋭く試される問題だからだろう．一昨年度起きた相模原障害者施設殺傷事件では，この根源的なテーマが能力主義，成果主義，合理主義に覆われた今の日本に問われた．

次々と職員が倒れる厳しい条件の中で取り組まれたしもちゃんの日光浴．映画を見た私は，毎日の職員のひたむきな関わりの結果しもちゃんに乳児期前半の生理的微笑みとも社会的微笑みともつかない笑顔が出てきたと捉えていた．ところが，中村は，「笑顔に焦点化するとしもちゃんの生活を支えるさまざまな取り組みの意味がかえって見えにくくなる」（p.133 上段）と

指摘する．そして，映画で主張したかったことを丁寧に論じた後に，この第３部で一貫して底に流れている，発達の内発性，発達主体（子ども）と実践主体（実践者）の関係の交換性－中村はこれを「心の風」と呼ぶ－という切り口から，「こういう風にも見ることができるのではないか？」とそれとは異なる見方を詳細な分析から提起する．映画から，「一瞬のきらめきともいえるしもちゃの笑顔を丁寧にゆっくりとひきだせたこと，それを大切なこととしつつも，このナレーションはいったんしもちゃんの笑顔から距離を置く．そして，その意味をきびしい職場の現実の中で子どもの見せるきらめきを心の糧にたどろうとする」と読み取り，しもちゃんの笑顔が厳しい現実の中で試行錯誤しながらも前に進もうとする実践者の志と歩みを励ましているという意味で，笑顔をはさんだ関係の交換性だと述べる．子どもの発達を個人の系に押し込むのでなく，集団の系，社会の系へと開かれた関係の中で捉えようとする具体的提起である．

そして，この後の論考，笑顔が出てくる直前の 20 秒間の分析に最も強い衝撃を受けた．

しもちゃんがベッドから乳母車に乗せられ，ガタガタと移動している間に喉に貼りついていた痰が動きはじめ，その変化を感受したしもちゃんが自ら排痰しようと試みる．それに気がついたスタッフが「どうした？」と尋ねながらも乳母車を押す手を緩めずにいて本人が自分で排痰するのを支える．その排痰の後に出てきたのがしもちゃんの笑顔であると分析する．私も笑顔にばかり注目してその前にしもちゃんが自分の身体の変化に気づき，自分の身体を心地よくしようとしていることには注目していなかった．映画そのものから受けたのに勝るとも劣らない見方の変換である．子どもを見るための道具としての発達理論だったはずが，目的と手段があべこべになって，「道具である理論のフレームワークに子どもをあてはめ，そこからしか子どもの姿を見なくなっているんじゃないの？」「それで発達を理解した気になってるんじゃないの？」と言われているようだった．

２　感動と学びを実践に生かす

やまびこ園・教室に異動になって１年目．難治性のけいれんがあって重度の身体障害と知的障害とをあわせもつお子さんの発達相談をした時だった．ちょっとしたサインを見逃さないよう療育時および発達相談時に撮ったビデオを何回も見返して保護者との相談に臨んだ．保護者は懸命に関わっているのに表情が変わらないことや，笑顔が出ないこと，また食事場面で指しゃぶりし，何とか取ろうとするけれどやめられないことを深刻に悩まれていた．ビデオを保護者にも見ていただきながら，笑顔という出し方ではないかもしれないが，本人が周りの関わりを受けとめ，その中でも自分が心地よいと感じる関わりや人を選んでいるように見えること，よく見ると自分で食べ物を取り込もうと指しゃぶりしスプーン代わりにしているように見えることを伝えた．食事場面は意欲的に見えた姿から「食べることが好きなのかな」と尋ねると，「実は…無駄かもしれないけれど，私も夫も食べることが好きなのでこの子も好きになってほしいと毎日台所の近くにラックを持ってきて座らせ，食材を見せ，包丁で切る音なんかを聞かせてたんです」とのこと．このように伝えながらも保護者の悩みに正面から応えられたのだろうかと自問自答する日が続いた．しかし，この発達相談の後，担任も保護者も自分の思い違いじゃなく，確かに子どもが自分で食べ物を取り込もうとしている，友だちに興味を向けていると捉え，そこに応答するような関わりを始めた．するとどうだろう．笑顔こそ見せない

が，半年間で、声の大きい熱い関わりをする先生やあまり出会わない職員には顔を背け指しゃぶりをするが，担任が声をかけると顔を上げ指しゃぶりを外す．お手伝いを位置づけ，調理室からワゴンを押してコーナーを曲がって自分のクラスが見えると，それまで垂れていた頭をすくっと持ち上げ，ワゴンを持つ手に力を込めるようになってきた．

その時に本が出版され，自分の中で引っかかって絡まってしまった糸がほどけたように感じた．ベッドから我が子を起こし，ラックに乗せて台所に連れてくるのは一仕事である．また友だち同士を横にしたり，ウオーカーにのせ，子どもが自分でしていると思えるようにワゴンを運んだりするのも一手間，二手間いる．しかし，中村が言うように，子どもの自分で～しようとするサインを見逃さず，それが実るようにおとなが生活を下支えした．こうした取り組みが，中村の言う発達の交流関係を成立させたという事だったのだ．

あまりの感動に，重度の身体障害者と知的障害者をあわせもつ子どものクラスの保護者学習会に，しもちゃんの姿の読み取りを題材に，いかに毎日の生活が大切か，その中で「子どもが“～したい”と思っていることを一緒に見つけていき，それを応援していきましょう」と話し合った．

するとどうだろう．昨年度は訓練や医療受診で低かったクラスの出席率が見る見る上がり，毎日ほぼ全員が揃い，担任がうれしい悲鳴を上げることとなった．毎日の登園が積み重なると，こうかもしれないと点で見えていたきざしが線になり，誰にでも見える変化となった．半年経ち冬になっても出席率は高いまま．中村が投げたボールを保護者はしっかりと受け取り，投げ返した．恐るべきパワーである．

おわりに

人として人間らしく生きる権利が少しずつ侵害されてきていると感じるこの頃．映画から50年経っても同じようなせめぎ合いが続く今，人間の発達を実践者や集団，社会というように広く捉えつつ，中村が繰り返し提起するように，子どもの姿の中に心の窓を見つけ，大いに議論し，実践していきたいし，実践していけるような社会をつくりたいと励ましてくれる一冊である．

（にしはら　むつこ）